大ナゴヤ大学学長が経験する「社会起業」とは？

■③■

さわやかな対応支持

誰もが参加しやすい雰囲気に

地域資源の発掘や発信、ゆるやかなネットワークづくりを進める上で重要な役割が「ボランティアスタッフ」です。第3回はこの役割の重要性についてご紹介します。

授業支えるボランティアスタッフ

授業運営をスムーズに行う上で、学生との「接点」としての役割を担うボランティアスタッフ（以後「ボラスタ」と省略）の存在は欠かせません。

大ナゴヤ大学の特長は、なんといってもこのボラスタのさわやかな対応にあると感じています。授業終了後には参加者から「スタッフの皆さんが親切で清々しい対応だった」「私もボランティアスタッフとして関わりたい」などのメッセージをいただくこともあります。

開校前、ワークショップやオープンキャンパスを行うにあたり最初に取り掛かったことは、将来のリーダー格となるボラスタを集めることでした。食事会・説明会を開催して募集を行い、現在では登録数も80人を超すまでになっています。

大ナゴヤ大学として初めて「マニュアル」を作成したのもボラスタ向けのものでした。ルールはシンプルですが『友だちの友だちがホームパーティーに来た』感覚で相手の気持ちになって柔軟に対応をしよう」という点をしっかり伝えています。

また開校前、モデルとなるシブヤ大学学長へのヒアリングで、重要な「こだわり」として挙げられたことが「ボラスタによるホスピタリティのある対応」でした。シブヤ大学の授業に初めて見学参加した際のボラスタの印象は非常にさわやかで、まさにホスピタリティのある対応そのものでした。この経験が私にとってもひとつの重要なこだわりとなり、ボラスタには常に「初参加の学生さんにも気軽に声掛けをしていこう」と伝え、誰もが参加しやすくする雰囲気づくりをお願いしています。

授業後、ボランティアスタッフと実施する「振りカエル会」

さらに授業の後は、毎回必ずその日のうちに振り返りの場を設け、授業の感想や関わった自分自身の内部変化の確認（自己開示）、またメンバー同士お互いの活動を褒め称え合い、次回へ向けた改善策やアイデアを出すための時間を持つようにしています。

やがてボラスタ内から主体的にミーティングを行う場が生まれ、授業を企画する「授業コーディネーター」と事前に確認を行うための進ちょく管理表やチェックリストなどの作成を自ら申し出る者や、ボラスタ企画による授業提案、授業を後追いで再体験する「補講」の企画・運営を行う者など、さまざまな取り組みを自発的に行う風土が生まれました。

団体の運営の質は「どれだけ主体的に関われる人がいるか？」で異なるものだと思います。コアとなる私たちの成長と同時に、ボラスタが主体的に関わり自己の成長を続けながら地域への貢献を行う「与えること＝得ること」の仕組みづくりを心がけています。

【NPO法人大ナゴヤ・ユニバーシティー・ネットワーク学長・理事長　加藤慎康】

DAI-NAGOYA UNIVERSITY NETWORK

中部経済新聞	平成22年4月15日　第3回	4面　名古屋経済ﾜｲﾄﾞ